

宇都宮工

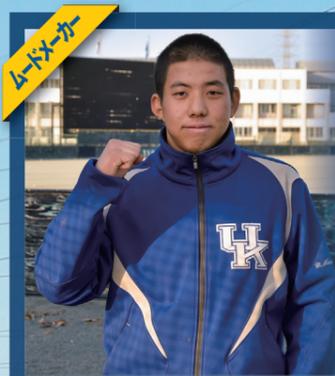
「戮力協心」

りくりよきょうしん



田島駿
(2年=左翼手)

175センチ82キロ、身体の強さを活かしたスイングで強烈な打球を放つスラッガー。秋の打率は5割以上。大田原戦ではホームランを放った。秋季県大会優秀選手。



金子真翔
(2年=一塁手)

前チームでは「戦う伝令」としてチームを盛り上げた。新チームの秋はベンチ外だったがスタンド応援でチームの役割を遂行。春・夏はメンバー入りを目指しながら、ムードメーカーとして完全燃焼を誓っている。



秋準優勝、夏4強など4大会連続好結果 「甲子園へのルート」を切り拓く戦い

春夏計9回の甲子園出場を誇る宇都宮工。確固たる力と野心を秘めたチームは、虎視眈々と頂点を狙っていく。

■2002年の選抜出場から24年

再び頂点に立つ瞬間は確かに近づいている。春5回、夏4回の甲子園出場の実績を誇る強豪校で、1959年夏の甲子園で準優勝となった栄光を持つ。甲子園では準優勝のほか、1度のベスト4、3度のベスト8の結果を歴史に刻む。2002年には関東大会を制して選抜甲子園出場を果たした。あれから24年、甲子園へのルートが見えてきている。2024年秋大会は準優勝で関東大会へ出場。2025年春・夏は2大会連続

でベスト4、同年秋もベスト8へ進出し、県内4大会連続でベスト8以上の戦績を残す。昨夏は甲子園まで「あと2勝」。栃木のトーナメントは頂点が見えてから勾配が増す。困難を乗り越えた先に甲子園が待つ。

■全員が心をついて戦っていく

伝統校を率いるのは、OB指揮官・大森一之監督だ。1996年の春選抜では母校を率いて甲子園ベスト8、2002年にも選抜出場を果たした。那須清峰を経て2014年に再び母校指揮官に就任。平成から令和へと時代が移り、高校野球を取り巻く環境も変わってきたが、大森監督は「いまどき世代」の生徒たちに寄り添いながら、指導に情熱を注ぐ。スローガンは「戮力協心

(りくりよきょうしん)」。全員が心をついて力を合わせ目標達成を目指すという意味で、宇都宮工の志を示している。

大森監督は「チームづくりは吹奏楽と同じ。各奏者の音や気持ちのひとつひとつによって曲になっていく。野球は選手たちの技術が一つになったときに、大きな力が生まれる」と説く。

■打撃力を武器に栃木制覇へ

今年のチームは、攻守の要・増川風雅主将(2年=三塁手)を軸に団結している。打線は1番・村上大悟(2年=右翼手)、2番・新井脩叶(2年=遊撃手)がチャンス演出し、3番・増川、4番の田島駿(2年=左翼手)へつなく。田島は秋大会大田原戦で豪快なホームランを放つなど実力を発揮し県優秀選手に選出された。投手陣は変化球が冴える茂筑光太(2年)、最速135キロ右腕・原知揮(2年)、安定感ある鶴見悠聖(1年)

らタイプの違うピッチャーが揃う。秋大会は準々決勝で屈したが、チーム課題を持ち帰り春・夏へ備えている。主砲・田島が「どんな相手でも気持ちで負けずにフルスイングしていく」と話せば、増川主将は「甲子園を目指して部員全員の気持ちをついて戦っていきたい」と夏を呪む。選手たちは全員が心の地図を広げて「甲子園へのルート」を探っていく。

宇都宮工業高校

【住所】栃木県宇都宮市雀宮町52
【創立】1923年 【甲子園歴】春5回・夏4回
宇工(ウコウ)の通称で呼ばれている伝統校。甲子園は春夏計9回出場。1959年夏は選手権準優勝。1996、2002年選抜出場。

主将の チーム分析

増川風雅 主将
(2年=三塁手)

甲子園出場へチーム一体

「今年の宇都宮工は打撃力を活かして打ち勝っていくチームです。今年のチームスローガンは「戮力協心(りくりよきょうしん)」です。甲子園という目標へ向かって一体となって戦っていきたいと思っています」



宇都宮工・大森一之監督 全員の気持ちを一つにする

「春からはDH制が採用されるが、投げて打つという野球の本質は変わらない。甲子園に行くためには部員全員の思いが大切だ。チャンスは必ずあるので全員の気持ちを一つにして戦っていきたい」

1967年栃木県出身。宇都宮工一垂細大。大学卒業後に宇都宮工に着任し26歳で監督就任。1996年の春選抜でベスト8、2002年には関東大会を制して選抜甲子園出場。2024年秋準優勝、2025年春夏ベスト4。